



徳田平市氏
1881年、現岩美町大谷生まれ。兄と水産会社を興して成功し、新設中学校設立費を全額寄付した



1923年3月に完成した第一校舎。木造で建坪138坪。学校の敷地は約4843坪だった



団塊世代が高校入学を迎えるにあたり新校舎を建設。創立40周年の1963年に落成した



1988年3月、正門に「東雲橋」が完成。天神川を真っ直ぐ渡って入れるようになった

鳥取東高校の今



学校生活

9月に開催する「東高祭」はクラス演技に合唱コンクール、部活動発表など盛りだくさん



運動部は男女合わせて18、文化部は14の部活動があり、およそ9割の生徒が所属する

鳥取の未来を拓く「人財」を育む

鳥取市立川町の鳥取県立鳥取東高等学校が、創立100周年を迎えた。

実業家の寄付で開校が叶った同校は、時代が移り変わるなか、生徒と教員との絆を伝統に、鳥取の若者の夢を育て続けている。学校の歴史や特色、生徒への思いを、中島靖雄学校長に聞いた。



とした教育を展開した。戦後、学校制度の改変を受けて鳥取県立鳥取東高等学校となり、一時は農業高校や工業高校を統合。後に再度分離して普通科単独高校となり、現在に至る。

同窓会は「東雲会」。障がい児教育の先駆者である糸賀一雄氏やマラソン競技のオリンピック山下佐知子選手、政財界人や各界の第一人者など、卒業生の活躍は目覚ましい。中島校長は「県外に出た後、帰って来て地元貢献する卒業生も多い。鳥取を支えている学校だと思えます」と、地域での役割を自負する。

三兎を追う学生生活 厚い信頼関係が伝統

現在生徒数は、定員40人が7クラスで1学年約280人。初代校長が定めた「生徒訓條」と、それを平易に改めた「生徒信條」が掲げられ、その精神は「克己」「親和」「進取」の3つの言葉に集約されて東高生の道標となっている。



鳥取東高校第20代校長 中島靖雄先生

さらに鳥取東高校には、「二兎ならぬ「三兎」を追い、三兎を得る」という教えがある。その一つは勉強。普通科と理数科があり、進路に応じたカリキュラムで学ぶ。理数科は県内外の大学・企業との共同研究を行う機会もある。県内で初めて文部科学省よりスーパーサイエンスハイスクール（SSH）に指定され、DNAを扱う高度な実験も校内で可能だ。また、全員が履修する「鳥取学」では地元の専門家を招き、幅広い分野にわたって鳥取を深く学ぶ。

二つめは部活動。32の部があり、生徒の所属率は9割と高い。部活動に参加しない生徒も、県や地域の活動に参画するなど、課外活動にいそしんでいる。そして三つめは学校行事。遠足

に球技大会、研修旅行や冬季高原教育など、経験と交流を深める行事が数多くある。特に学校祭は、生徒と教員が協働で作りに上げるのが東高流だ。祭り全体も合唱などのクラス対抗演技も、校内が一体となって盛り上げる。

「東高の校風を一言で表せば、師弟同行。生徒と教員の信頼関係が厚く、教員の面倒見の良さは古くからの伝統のようです」と中島校長。生徒は質問や相談のため、頻繁に職員室を訪れる。教員は生徒一人ひとりを細やかに見て丁寧な話を聞き、ともに道を探る。週れば開校当初、生徒と教員が力を合わせて河原から土砂を運び、グラウンド用地を整備した、その絆がいまも受け継がれているのかもしれない。

時代に即し次の100年へ 生きる力を育む3年間を

鳥取東高校は今年、100周年を迎えた。6月23日の創立記念日には、卒業生の中江康人さんを講師に招いて講演会を催した。中江

さんは、国内最大級の広告制作企業グループ、AOITYO Holdings株式会社の代表取締役グループCEOだ。9月7日の記念式典は、新型コロナウイルス感染症防止のため生徒と関係者のみで厳かに、かつにぎやかに執り行う予定だ。

中島校長は「100年で時代は大きく変わりました。面倒見の良さという特長はそのままに、変化に柔軟に対応し、選ばれる学校であり続けたい」と先を見据える。生徒には「卒業後も語り合える思い出仲間を、たくさんつくってほしい。きっと生きる力になります。人に可愛がられる素直さを大切に、誰も替われない「人財」になってもらいたい」と願う。

高校で過ごす3年間は、かけがえない時間だ。人としての成長と、充実した悔いのない日々を求めて生徒は懸命に「三兎」を追い、80人の教員は全力で支える。鳥取の明日を照らす東雲の光が、清々しく輝いている。

歴代の校長先生(平成18~令和2年)



第19代校長 尾室真郷さん



第18代校長 藤原辰広さん



第17代校長 坂口祐二さん



第16代校長 山下俊一さん

徳田平市氏が新設費を全額寄付 卒業生は県内外で活躍

鳥取東高校が「鳥取県立鳥取第二中学校」として産声を上げたのは、1923（大正12）年の春だった。大正デモクラシーを背景に鳥取でも進学熱が高まり、既存の鳥取中学（後の鳥取西高校）の入学倍率は3倍を超えていた。新たな学校が望まれるも、度重なる水害の対策で千代川の大規模な改修工事を控えていた県は、財政にゆとりがなかった。

そこに手を差し伸べたのが、岩美町出身の実業家、徳田平市氏だ。水産業で成功を収めていた徳田氏は1921（大正10）年、下関の中に県から相談を受け、熟考の末、中学校新設費用15万円の寄付を決定した。その額は、当時の鳥取市歳出の半分にあたる規模で、徳田氏にとっても決して容易に提供できる金額ではなかった。徳田氏は5年をかけて寄付を完済し、その間、家族も節約して協力したという。

「何としても鳥取のために、という思いが強かったのでしょう。徳田氏は表に立つ行動を控えられましたが、私たちは生徒に功績を伝えていきます」と、鳥取東高校校長の中島靖雄先生は敬意を表す。徳田氏は今年、鳥取市名誉市民に選ばれた。

鳥取二中は開校初年から臨海学校を実施し、県内中学校初のプールを設置するなど、新しくのびのび